

届け 世界の果てまでも

令和2年12月15日

No. 54

文責 校長 飯久保一男

日本人の美しい礼儀作法① …相手を敬い、思いやること

西日本新聞の記事です。自戒を込めて掲載します。



日本の歴史にマナーが登場したのは、一説には飛鳥時代とされています。このころ制定された「冠位十二階」や「和をもって貴しとなす」で知られる「十七条憲法」で朝廷で働く人の階級や、道徳的な行動規範を示したのです。江戸時代には婚礼や葬儀、日常の飲食、服装、文書作成や口上の述べ方などにわたって、しきたりや作法が広く浸透しました。身分にかかわらず礼儀が人の「印象」を表すとされるようになり、現代に引き継がれています。

…江戸時代の「奢侈禁止令」や服装の色の「四十八茶百鼠」についてNo. 47で紹介しました。

礼儀作法の原点は、向き合う対象を大事に思う気持ちです。時代が変わってもその根幹は変わりません。礼儀は、人に対してのものだと考えられがちですが、物に対しても同じです。物の扱い方を美しくすると、印象は大きく変わります。例えば、書類などを相手に渡すときは、両手で持ち、胸の位置から相手の胸の位置へ渡しましょう。ドアを閉めるときは、最後まで気を抜かず、静かに閉めましょう。このように、日常のささいな動作を大切にしたいものです。

感じが良いとは、相手から見た印象のことです。流行や自分のこだわりで決まることではありません。話し方や立ち振る舞い、相手が目や耳にするもの全てが、その人に対する評価につながるのです。

音については、自分では気が付かないことがあります。ドアやキャビネットを閉める音、足音、食事の音、そして声の大きさも。一緒にいる相手や周りの人に対して耳障りな音を発していないか気を付けましょう。なおについては「スメルハラスメント」という言葉などとともに、昔に比べて配慮されるようになりました。口臭やたばこのにおいに気を付けるのはもちろんですが、香水や柔軟剤も、自分が良い香りだと思っても、他人がどう思うかは人によって違います。加減を考えましょう。

落ち着いた良い印象を与えるにはどうすればよいのでしょうか。すぐにでも取り入れたい5つのポイントを紹介します。

- (1) あいさつ 目を見て笑顔で。世界共通です。
- (2) 話し方 はきはきと、丁寧に、相手に届く声で。
- (3) 1回1動作 話しながらスマホを操作するなど、相手を不快にします。
- (4) 髪を触らない 不潔な行為とされたり、幼稚な印象を与えたりすることも。
- (5) 腕組みしない 相手を警戒して自分を防御しているように見え、威圧的な態度に見えます。



好印象と思われるか、感じが悪いと思われるかで、人付き合いの明暗が分かります。大切な出会いは、いつ、どこにあるか分かりません。日頃から心得ておきたいものです。まずは、周りにいる人の良いお手本を観察し、取り入れてみるといいのではないのでしょうか。

私には腕組みをしてしまう癖があります。威張って見えてしまうのでしょうか。反省です…。

日本で生きていく子どもたち、未来の日本の担い手である子どもたちにとって、日本の礼儀や作法はぜひ身に付けてほしいことです。南アルプス市では、「小笠原流礼法」を活かした心の教育を推進しています。その小笠原流礼法の授業の中でも、あいさつの仕方やお辞儀の仕方をはじめ、様々な作法を学んでいます。



肘をついて食べません

礼儀や作法は、あいさつやお辞儀、整理や整頓の仕方、掃除の仕方、敬語などの使い方、トイレや風呂の使い方、着る物の脱ぎ方・たたみ方、履き物の片づけ方、電話のかけ方、お茶の出し方・飲み方、お礼の言い方、箸の持ち方、茶碗の持ち方、食べるときの姿勢…などたくさんことがあります。

これらを、一つ一つ身につけて信頼される人になってほしいと思います。大したことではないといい加減にしておいて、大人になって、笑われたり、信用をなくすことにつながったりすることすらあります。

小笠原流礼法が大切にしているのは、「相手を敬い、思いやる気持ち」です。相手を敬うこと、思いやることが、日本人の美しい礼儀や作法のもとになっています。小笠原流礼法の発祥の地である本校で学ぶ子どもたちには、小笠原流礼法とその極意である「相手を大切に思う心」をより深く学んでほしいと思っています。



朝の体育館での全校集会の出来事である。

最初に校長が全校生徒に向けて話をし、表彰式も行った。

その後は、学年ごとに分かれ、健康観察や担任からの指示・伝達が行われた。

それらが終われば、学年ごとに解散となるので、生徒たちは体育館の出口に向い、校舎へと移動する。

3年生が1番早く終了し、体育館の出口にある下駄箱に向かって足早に移動を始めた。

そんなとき、ある3年男子生徒のとった行動は、私自身を不可解にさせるものであった。

その行動とは、体育館の出口にいちばん遠い場所で解散したのに、

その場で自分の履いていたシューズを脱ぎ、手に持って移動を始めたことだった。

これが夏の時期であれば、体育館の出口が混雑するのを避け、

少しでも早く下駄箱に自分のシューズを置きたいための行動かと想像できなくもない。

しかし、時期は12月を迎え、体育館フロアの冷たさも足に堪えようかという寒い時期である。

私は、彼に尋ねてみた。

「なぜ、そんなに早くシューズを脱いで移動したの？」

すると彼の返事は、私の予想した考えを、根底から覆すものであった。

「まだ話が終わっていない学年があったので、音をたてないようにと思い、脱ぎました。」

という答えだったのである。

シューズのかかとを踏んで歩く生徒を、これまで度々注意することはあったが、

逆に今回の出来事は、そんな浅はかな自分自身の考え方を反省するとともに、

子どもたちのもっている素直で純粋な気持ちに触れ、

心が温くなる朝の出来事となった。

「心に響くちょっといいはなし」より

※中学校の話です。本校は体育館も同じ上履きで活動しますが、学校によっては体育館用のシューズがあり、体育館では履き替えて活動する学校もあります。



本校5年生の移動(検診)